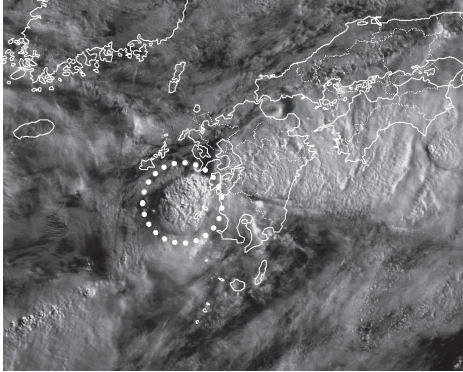


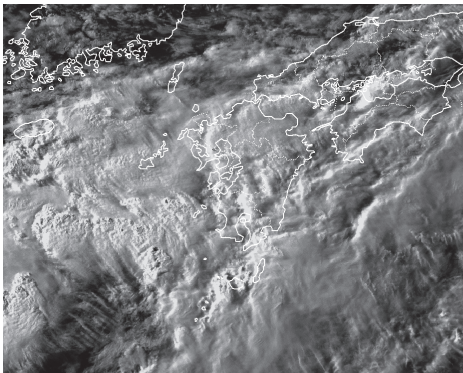


今月のひまわり画像—2020年7月

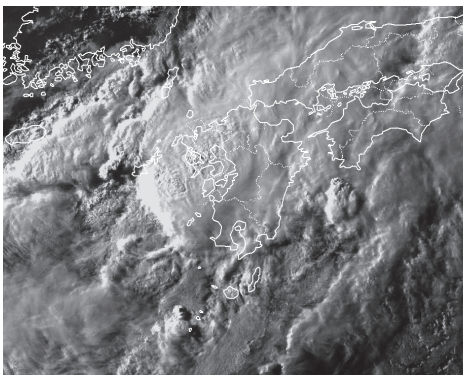
令和2年7月豪雨



第1図 2020年7月4日07時（日本時間）の九州付近における可視画像，点線はCb域。



第2図 5日18時の九州付近における可視画像。



第3図 7日18時の九州付近における可視画像。

2020年7月3日夜（日本時間）から4日朝にかけて，熊本県や鹿児島県では局地的に猛烈な雨が降り，気象庁は両県に対して4日04時50分に大雨特別警報を発表した．熊本県を流れる球磨川が氾濫し，広範囲で浸水して甚大な被害が発生した．

第1図は，大雨特別警報発表の2時間ほど後となる4日07時の九州付近における可視画像である．九州の西海上には，直径約100kmのCb（積乱雲）域が見られる（第1図中の白点線円内）．雲塊の西側は雲自体の影となっているため，やや暗くなって見える．このことから，非常に発達した（高い高度に達している）Cbであることがわかる．雲頂高度は， T_{BB} （等価黒体温度）が最も低いと推定される領域が -70°C 以下であることから，約16kmに達していたとみられる．

第2図と第3図は，5日18時と7日18時の九州付近における可視画像である．両図ともに九州およびその近海には発達したCb域が存在しており，このような雲塊が，5日夕方から8日にかけて九州に次々と流れ込み，九州の各地では猛烈な雨となり，6日16時30分から7日11時40分に，気象庁は長崎県・佐賀県・福岡県に大雨特別警報を発表した．熊本県では，アメダス観測所の熊本県湯前町湯前横谷で，4日11時00分までの24時間降水量489.5mmを観測し，県内の7地点で観測史上1位の値を更新した．

梅雨前線は，日本付近上空の偏西風の北上が遅れたことにより，この後も日本付近に停滞し続け，各地に大雨をもたらした．1982年以降の統計において，7月上旬（1日～10日）に全国964地点のアメダスで観測した総降水量の総和は208,308.0mm（1地点あたり216.1mm）に達し，旬ごとで最大だった2018年7月上旬（平成30年7月豪雨（西日本豪雨））の207,526.5mm（1地点あたり215.3mm）を超えた．また，7月上旬に全国のアメダス地点で観測した1時間降水量50mm以上の発生回数も最多となった．気象庁は7月3日～31日に顕著な災害をもたらした一連の大雨を「令和2年7月豪雨」と名称を定めた．気象庁が名称をつけた豪雨としては，「平成26年8月豪雨」の28日間を上回り，過去最長となった．

（気象庁予報部予報課 河野麻由可）